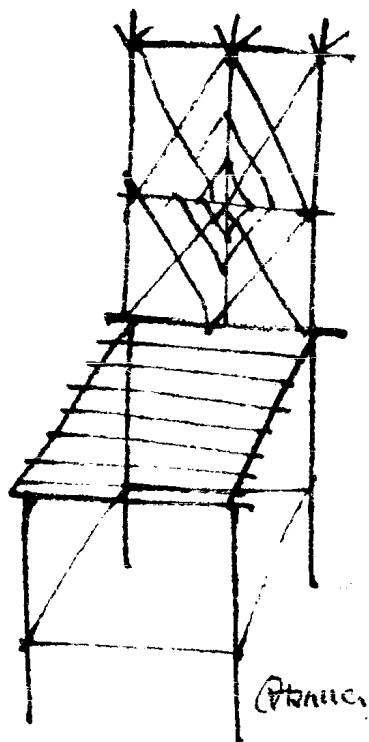




殺人教室

石原慎太郎



新潮社版

殺人教室

石原慎太郎

東京都新宿区矢来町 71
電話東京 (34) 代表 7111～9
振替東京 808 番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・凸版印刷株式会社

製本・神田加藤製本所

© Printed in Japan

目次

ファンキー・ジャンプ	5
ともだち	37
殺人教室	105
殺人キッド	159
男たち	217
後記	244

装
幀

伊
藤

明

殺人教室

フ
ア
ン
キ
ー
・
ジ
ャ
ン
プ

ホールは満員だった。玄関の前には当日売りの切符にもあぶれた客たちが未練氣に、今にも降り出しそうな空の下で背を丸めたまま突^つつたっていた。

タツノ照彦はポケットから引き出した切符を千切らせかぶっていたソフトのつばをあみだに上げるとロビーを突^つつ切^つて席に通じるドアの番号を搜した。

このホールでジャズのプレイヤーが招待の演奏会を開くのは全く久しぶりのことだ。過去松本敏夫以前にこの光榮に浴した先輩は何人かいた。しかし強いて言えばその時彼らの総ては本当の意味での当時のリーディング・プレイヤーと言うよりすでにコマースリズムに乗った *fatten daddy* であった。その点敏夫は今完全にビークにある。来朝したメッセンジャーズのアート・ブレイキやディズイ・ガレスビーが、日本に彼を発見したことによってだけでも、我々はこの国のジャズの本質的な水準について考え直さなければならぬと言ったのは誇張ではない。ディズイは、マキー（松木）の「ファンキー」は未だ何処の国のどのプレイヤーにも感じられなかったある薄気味悪さがあると云った。今日彼の演奏で我々が耳にする彼のファンキーなプレイは、或いは明日に比べて色あせるかも知れない。それ程、今日の敏夫の「ファンキー」は素晴らしい。そこにはリズムによって弾き出させられた人間のある種の恍惚の凝縮がある。

と「スウィングジャーナル」の紹介記事に書いたのはタツノ自身だ。

明日に色あせる、と書いたのはあながちタツノの杞憂だけではない。ニューヨークから帰ってのこの半年、敏夫の健康は目に見えて非道い。アートブレイキの招待でパートランドの演奏で彼の勝ち得た名声は、実、彼をどう救いもしなかった。

敏夫の演奏のある部分についてファンキーと言う表現はもう適切でない。とタツノは思う。それはもう明確に *narcotic* と呼んでもいい。

麻薬を止め、その効能に代るものを捜すために酒を飲みだして胃を滅茶苦茶にし、挙句に彼はまた薬に戻っている。

クインテットの四人が揃っている。一人だけ楽屋にまだ顔を見せないのは敏夫だ。マネジャーの村上がいらいらしていた。

「彼は本当に来るのかね」

ベースの牧野がからかうように言う。

「悦子のアパートに電話して見たかい」

島が訊いた。

「いや、悦ちゃんに訊ねても無駄だ。それより何故摩耶を捜さない」

「アパートにはいない。電話に誰も出て来ない」

「俺は昨夜二人と一緒にいるのを見たぜ。昨夜と言うより今朝の話だ」

牧野が言った。

「しかし来るだろうさ、未だ十五分ある。マキーは死んでない限り必ずやって来るよ」

「それを誰が受け合うね。死んでいないと」

「よしてくれ！」

爪を噛みながら村上是言った。

「彼をあんなにしておくのは君らの責任もあるぞ。俺はあんな奴は初めてだ」

「死んだバード以上かね」

「同じだね、ただ彼以上なところは、彼がバードならもうとくに死んでいると言うことだけだ」

「しかし彼は俺の知っている限りで十五キロは瘡せたよ」

「——けど、一体何故——、俺にはいつもわからんよ。女かね、摩耶が——」

「そんなことじゃない。お前にはわからんよ」

竹田が言う。

「——それは彼だけの問題さ」

「俺は今日ドライブ出来そうだ」

ジェリーが独り言に言った。

「結構。しかしマキーが来ないでどうする」

「構やしねえよ」

ジェリーは口笛を吹きスティックとスティックをかちかち合わせて見せた。

「君らは何故焦らん？」

「焦ってどうなる。良いかね、少くとも俺には穴倉で演るのこの舞台でやるのと同じく違ひもしやしないんだ」

「マキーなら来たよ」

廊下の扉を開け煙草を吸っていた牧野が村上に言った。

間違ひなく敏夫はやって来た。急いだ歩調ではないのに、部屋の椅子に坐ると彼は喘いだ。

「煙草をくれないか牧野」

「OK、但しマリーナじゃないぜ」

「その袖口はどうしたんだ。絞ったように濡れてるぞ。指を怪我している」

「ああ」

とだけ敏夫は言った。

「まあいい、手首がないよりはな」と島。

敏夫は何故か驚いたような眼で皆を見廻し、睡たげに眼を瞬くと、

「どうかね、みんな？」

「OK、非常にいいよ」

マキーズ・ブルー

幕が上った。拍手が湧いた。

舞台にはピアノとドラムだけがあった。

男たちが楽器を下げて、出て来た。敏夫はそのまま背を向けて椅子に坐る。それが彼らのスタイルだった。

掌をかかげ、一瞬間をおくとその掌で髪を掻き上げた。

横に張り切った糸が舞台の上に感じられた。

敏夫は持ち上げた指をキイに置いた。

瞬間、横の糸へ縦が編み込まれた。

キイが掌の先で転げる。

ジェリーがそれに乗る。触るようなスティック。

ベースが滑り込む。ピアノの間にベースが沈む。

ピアノは、丸く、浮き上り、

こぼれ、こぼれ、

はずんですべる。

ジェリーが底でスティックを流しながらそれを支える。

小さな、HOP、&、TRIP、小さく。

おお、なんて軽い――

TOHM TOHM ZUHM

RIPAH・PAHPAH・PAHHH――

ひっかけるように竹田のベットが入る。続いて島のテナーが

ピアノが沈み、ドラムとベースのビートが更に沈んでいき、ベットがくすぐり、小さく身をよじり、すべる。

——セントラルパーク。停められた白いリムジーン。車の中で女がなでていた黒いシヤム猫——。

竹田の大きなヴァイブレーションを、島のサクスが拾う。

——短い会話だ。

サクスが言って聞かす。

LOOK PICKY ピッキー ごらんよ あれが隣りのマリイだよ

ロイが死んだんだ

何で？

何でもいい

何で？

ロイは死んだんだよ 河へ落ちて

ロイはお酒を飲んでいた

でも それは大したことじゃない

きつとほかに何かがあったんだ

ロイは死んだよ だからあの娘は黒い服を来て出ていく——

マリイの黒い着物——

あの娘もお酒を飲んでいる

黒い着物を着て？

そう 黒い着物を着てお酒を飲んでいる――

「H U H M――」

牧野がつぶやく。

トラムベットがサクスに替って話す。

――ずっと前見た小さなサーカスの話だ

それは日暮に 故郷の田舎の町の外れにやって来て小屋をかけた
河のほとりの空地に 金ボウゲの花が咲いている

天幕は色のあせた赤い――

いや 赤と白の縞だった

いや 青と黄の縞だ――

道化の男が一人 河の堤で魚を釣っていた

釣りながら男はトラムベットを吹いたよ

こんな風に―― R I E ・ E ・ E ・ E ・ E ―― P A H R U H

俺は魚釣りの小船で帰って来たんだ

俺は船を止めて見た

白い疲れたサーカスの馬

なにか 黒い獣の檻

同じ年頃の軽わざの少年

少年は馬にかいばをやり――

陽が落ち 河には風が吹いていた

風が吹いている 吹いている

風はずっと前から吹いている

敏夫は思った。

竹田のベッドの後を、八小節、ソロに入らずただコードを押して過す。ベースもドラムも、沈んだビートでそれを見送る。

風が吹いているわ―― と沙和子は言った

何故沙和子はいなくなった――？

そうだ 彼女はここにはいない